森の自由人 128

狸泥舟

スマホの機種変更から垣間見た年末の世相

スマホの機種交換をした。バッテリーが 60%も残っているのに急に落ちるようになったのだ。7 年前にガラケーから格安のキャンペーンで移行したものだったが、iPad と併用していたので小さい iPhone7 という古い機種にしたのが、まあ失敗と言えば失敗だった。OS のバージョンアップは古い順に出来なくなる。それでもそんなに支障なく使えたが、バッテリーの故障が致命傷となった。

さてどのような機種にすべきか珍しく悩んだ。そこでたまたま来た次男に聞いてみたが、なかなか決め手が見つからない。大手の携帯会社に拘るつもりも全然ないのだが、ケーブルテレビなどとネットワークを組んで、細かい値引きでがんじがらめにしているものだから、それをチャラにして 1 から構築するのも面倒だ。

ということで、携帯会社のショップに行くのが一番楽だと結論づけた。若けりゃもっとこだわったのだが。

まず、新宿の家電量販店の中にあるショップに行ってみた。ほとんど開店直後だったこともあって、お客は 1 人ぐらいしかいない。私の携帯会社でない他社の店員がいていきなりこう言った。

「新しい機種は、スタートボタンがありませんがよろしいですか？」

こいつは何言ってんだ？

「スタートボタンって何ですか？」

「起動するときに押すボタンです」

「何でそんなこと聞くんですか？そんなものなくても起動できるのなら、べつにかまいませんがねえ」

「いや、スタートボタンにこだわる方が多いので」

こいつ、おれが年寄だと思って舐めてんな。まあ、確かに年寄がこだわりそうな気もする。そんな年寄が多いんだなあ。

こんな店員のいる店は御免なので、近くの携帯会社のショップを検索して行ってみた。ところが、今日は予約でいっぱいなので、後日予約してから来てくれと。明日は丹沢山麓まで行く予定があったので、何とか今日中に片付けたい。そこで池袋のショップに行ってみることにした。埼京線で移動中に旧式スマホを検索してみると、運よく 11 時から空いていたので予約した。やってみれば、結構スマホ使いこなしているなあ。それにしても新宿と池袋の格差、こんなところで感じた。

池袋店に入ってみると、数人のお客がいたが、対応している店員はインド系かイスラム系か、外国人が目立った。居酒屋では普通の光景だが、スマホ屋でもこれか。外国人排斥など

を軽々しく言うやつが多いが、これを見れば日本が外国人のお世話になっていることがすぐにわかる。それにしてもお客には老人が多い。我が身を忘れてそう思う。

担当スタッフは、中国人の若い女性だった。日本語は流暢で、日本人より上手かも知れない。親の代から帰化しているのだろうか。だいたい iPhone は高い。アンドロイドの倍はする。しかし、初スマホから iPhone なので、老人性保守症でアンドロイドに替える気がしない。いろんな機能があっても、実際使うのは電話、メールとウェブサイト、LINE、ニュース閲覧、天気予報、地図、カメラ・写真・・・、結構使っているなあ。しかし、ゲームはしない、動画は見ない、SNS も見ない。唯一 Facebook はちょっと使うが、自らは発信しない。最近は乗っ取られたり、乗っ取られたやつからくる友達リクエストが多いので物騒だ。そろそろ退会の潮時かと思う。

だからスマホは最新版でなくてもいいのだが、カメラ機能が高性能なやつなら、カメラを持ち歩く必要がなくなって楽だろうと思い、最新版の iPhone17pro に決めた。機種代は一括払いも月割りも変わらないので、月割りにして、あと携帯会社との通信契約だが、前回ガラケーからスマホへの切り替えで格安だったので、これが高くなることは覚悟していた。それでも今後安くできる裏技を教えてくれて、何とか機種代含めて 1 万円ちょっとに抑えることができた。

契約の中身を見て、保険料が月額 2,000 円でちょっと高い。これはアップル社との契約になるのだが、まあ 20 万円を超える品物だし、私の持ち物としては車の次に高いんじゃなかろうか。それを持ち歩いて、壊す、失くす、盗まれる危険性があるものだから、保険に入っておくのが無難だろうと観念した。

契約が済んで、次はデータ移行である。これも自分でやってできないことはないと思うのだが、5,000 円ばかりでやってくれるのなら、ストレスのない方がいい。これが認知症への近道かなと危惧しつつも、スッタフさんに任せることにした。

あとカバーと画面の保護シートも購入して、シートを画面にきれいに貼ってもらった。これもストレスかかるし、失敗すると惨めなんだよね。両方合わせて 7,000 円ぐらいのものだったが、これも月割りになってラッキーだった。

てなことを 11 時から昼飯も食わずに 14 時半ぐらいまで延々と相対でやってもらった。こちらは認知のせいか、出てこない単語、例えば「機種変更」、「データ移行」があって意思疎通がもどかしい。スタッフさんにその旨を伝え、苦労かけたねえと労うと、

「お客さん、全然認知なんかじゃないですよ。安心してください!!」

と太鼓判を押してくれた。これはうれしかった。

まあ、確かにくそじじいが多いから。特に偉くなったやつ。相手が女性だったり、外国人だと、自分の無理解、能力不足を棚に上げて、上から目線、高飛車な態度で威圧してくる。さもなくば、ほぼ認知で説明をまったく理解できなかったり、さっき聞いたこともすぐに忘れて聞き返す老人たちだ。たぶん若者たちはネットで購入・契約するから、こういうショップは老人たちのお客が多く、憩いの場になっている可能性さえある。

中公新書の「帝国陸軍—デモクラシーとの相剋」（高杉洋平）を読んだ（その4）まとめ

2.26 事件に至る陸軍の派閥抗争

満州事変は今日日本の長い戦争の時代の端緒となったと目されているが、犬養内閣の高橋是清蔵相の積極的財政支出によって、国内経済は好転する。日本は欧米列強に先駆けて世界恐慌から脱出するのである。農村の復興は少し遅れるが、人びとは消費社会を謳歌し、都市では若者が最新ファッションで闊歩した。世の中はいまだ大正デモクラシー期の延長線上にあったのである。

そのような世相なのに、陸軍では中堅幕僚将校が、海軍でも青年将校グループが台頭して、財閥と結託した政党による金権政治を終わらせ、軍部が政治の実権を握るという妄想の実現に走る。軍隊という閉鎖的な組織は、一般世間から隔絶していて、しかも武力という最も安直な権力を行使できる。それは軍人の驕り生み、世間知らずのぬるま湯組織が、妄想を産み出す土壌となっていたのだ。

そして組織の必然として派閥が生じる。陸軍中堅幕僚たちは昇進とともに軍政の実権の実現に近づき、職務として合法的に国家改革に乗り出した。その中心となった永田鉄山軍務局長らいわゆる統制派に対して、精神主義的で過激な青年将校グループいわゆる皇道派が形成され、人事問題などが絡んで対立が表面化する。そうした状況下で、永田は職務中に皇道派のメンバーに斬殺される。永田を失った統制派は自然消滅した。

このような事件を起こせば、ふつうの組織であればその与党は徹底的に排除されるだろう。しかし、派閥に中立的な人物を陸相にして、皇道派の懐柔を図ったため、皇道派をさらに増長させ過激化させてしまった。そして永田斬殺の半年後、2.26 事件が勃発するのである。

まったく陸軍内部の一部の青年将校グループが起こした革命ごっこは、何の関係もない国民や天皇にまで大迷惑を及ぼした。結局、蹶起グループが心の支えとしていた天皇の逆鱗に触れて、その断固たる意志によってしか事態は鎮圧され得なかった。

徹底されない粛軍

当然、天皇も国民も徹底した粛軍を望んだはずだが、これも徹底を欠いたのだろう。政党も政治家たちも、陸軍の未曽有の大失態を奇貨として、軍政を政治の配下に収めることをしなかった。統帥権独立の廃止や軍部大臣の文官制を推し進めるべきであり、それに対して天皇の裁可を得ることもできたであろうに。

事件後、統制派も皇道派も消滅したけれども、「世界最終戦論」を唱える奇行で知られた石原莞爾（かんじ）などが残り、相変わらず陸軍内部だけでなく、陸軍大臣の推薦拒否をちらつかせて組閣までを支配したのである。

盧溝橋事件と日中戦争への拡大

2.26 事件から 1 年半後、今度は盧溝橋事件が勃発して、ついに日中戦争がはじまった。

1900年に起きた義和団事件後の協定で、在留邦人保護のために北京近郊に駐屯が認められていた日本軍警備部隊が盧溝橋付近で夜間演習中十数発の銃弾が撃ち込まれた。これを中国側の攻撃とみなした日本軍は直ちに反撃した。

最初に銃弾を撃ち込んだのは誰なのか、真相は現在でも不明である。日本軍謀略説、中国共産党謀略説など諸説があるが、日本政府や陸軍中央が関知していなかったことは確実らしい。しかし、日本はその後の対応を誤って、泥沼の戦線拡大に突き進み、ついには米英相手の太平洋戦争に至って国を亡ぼすのである。

一報を受けた陸軍中央では、対応を巡って激論が展開された。「世界最終戦論」には時期尚早とする石原莞爾（作戦部長）は、全面戦争に発展することを恐れて、援軍の派遣には反対だった。しかし、直属の部下だった武藤章（作戦第三課長）は、大規模な増援を行って中国軍に一大打撃を与えることで早期に紛争を解決するとともに、緩衝地帯をつくり、そこにある重要資源も手に入れようという欲深いものだった。

議論は険悪化したが、武藤の拡大一撃派が圧倒的に優勢で増援に決した。当時は近衛文麿内閣ができて１か月、国民の人気は抜群で、そろそろ政治的成果を出したかった。誰もが中国との全面戦争など望んでいなかったが、満州事変の成功体験があって、中国軍は弱く、国際世論も盛り上がらず、戦闘は早期に収束できると楽観視していたのだ。これが、これからずっと繰り返される勝手読みの始まりだった。

中国を率いる蒋介石の対応は満州事変当時とは一変して、日本軍の増派に怯むことなく徹底抗戦を命じた。国際的支援を得るためにも積極的で、国際都市上海を戦闘の舞台に選び、各国の注目を集めようとした。日本は上海の居留民を保護するため、大軍を派遣せざるを得なくなり、そこで起きた凄惨な戦闘は日本の「戦争犯罪」として報道され、中国に国際的同情が集まった。

当初日本軍は連戦連勝で首都の南京まで攻略するが、中国政府は長江上流へ後退しながら徹底抗戦を続けた。凄惨な戦闘と過酷な追撃戦で荒（すさ）み切った日本兵は、南京で投稿兵や一般市民に対して凄まじい残虐行為を犯す。日本に対する国際世論は甚だしく悪化した。

政府も陸軍も和平工作を試みようとするが、戦果と犠牲に見合った政治的・経済的対価がつり上がり、中国政府が呑めるものではなくなった。逆にそれらの対価を下げれば日本国民が憤激する。

政府も軍部も責任回避

さらに事ここに至って統帥権の独立が禍して、政治と軍事が国民の反感を買わないように、つまりそれぞれが責任回避に動いて、制御不能に陥ってしまった。ナチスドイツのように一党独裁であれば政治と軍事の齟齬は起きず、良し悪しは別として、もっと分かりやすい形で事態は進んだであろう。

かねて日本の全体主義に独裁者のいないのが不思議だと思っていたが、これまでの経緯を見ると誠に日本的であり、これも一つの独創であろう。かくして政治家も軍人もそれぞれ責任が取れないまま、事態は欧米列強をも巻き込む大戦へと拡大し、滅亡を迎えるのである。

現代を生きる我々が、このような事態を回避するためにはどうすればよいのか。ここから1941 年 12 月の日米開戦までには、さらにいろいろな要素が絡んでくるが、それを語るとさらに長くなる。この辺で教訓をまとめても十分であろう。

無責任な国民世論と付和雷同

大正デモクラシーから日中戦争までの陸軍を見てきたわけだ。私は、日露戦争以降先の大戦終結までずっと陸軍が傲慢であったような印象をもっていたのだが、実際は浮き沈みがあったのである。それを決定づけるのは、国際情勢、国民世論、国会政党、そして陸軍内部の力学であった。

大正デモクラシー下では、アンチ・ミリタリズムの社会風潮のもとで、軍部は権威主義、軍国主義の象徴とみなされた。それを受けて陸軍でも民主化が進んだのである。

一方、男子普通選挙が実施されて民主化がさらに進んだが、当選するには膨大な費用が必要となり、政党と財閥の癒着が進んで金権政治が蔓延ったのである。これに対して、陸軍のエリート士官には疲弊した農村出身者が多く、政党や財閥への反感が若手士官たちに政治への介入を醸成していった。統帥権の独立によって政治は軍事に介入できないとされたが、軍部も政治に介入できない相互不干渉だったのである。また、軍人には選挙権も与えられていなかったことも、政治への希求を増幅したのだろう。

昭和に入り世界恐慌によって日本も不況に陥り、社会全体が沈滞する中、中堅幕僚将校が起こした張作霖爆殺事件とそれに続く満州事変によって、日本軍が満州から中国軍を駆逐して満洲国を建国すると、大衆のアンチ・ミニタリズムは一変して、陸軍の行動を熱狂的に支持するようになった。事件の真相を知らなかったとは言え、大衆・国民とは無責任なもので、付和雷同するのである。

政治の方も、陸軍が起こした陰謀を明らかにすれば国際的非難を浴びることになるから、隠ぺいするしかなかったのである。不幸にして、欧米列強もことさら日本を刺激したくないという思惑が働いて、黙認状態になったのである。これが中堅幕僚将校を中心とする陸軍の成功体験となってしまった。いつまでも中国軍は弱いはずがなく、列強も黙っていないのに。

こうして見ていくと、政治も軍部も一番気にしているのは国民世論なのであろう。

政党は、国民の支持がなければ成り立たないので、常に豹変する危険を孕む世論に阿り、票を買うために財閥と癒着して金まみれの金権政治となる。もう 1 つ国際情勢に敏感であって、国民世論のみに頼ることもできない。現在もまったくこの通りで、政治家には理屈を超えたバランス感覚が必須なのであり、時には国民世論に立ち向かうぐらいの度胸が必要なのである。

軍部は武器という生殺与奪の権限を持っているから、暴走を始めると大変なことになる。それを掣肘するのは政治の重要な役目であり、国民も軍部をしっかり監視し、政治を後押ししなければならない。軍事政権が誕生してからでは遅いのだ。国民の自由と権利は大幅に損なわれる。

まとめ

先の大戦前の全体主義・軍国主義呼び起こした主因は、どうやら移り気な国民世論と付和雷同であろう。真の国益とは何かともよく考えず、一時の戦勝に踊らされ、過激な意見に扇動され、挙句の果ては忖度に身を任せて自由を失う。

日本人は今も変わらない。それどころかSNSの登場によって、さらに真偽不明の情報が即座にまん延し、容易に扇動されて、乗り遅れまいと付和雷同する。これは教育の欠如以外の何ものでもない。真の国益が平和、この１点につきることを誰も語らない。